

明し、それが一定の地域内でまともな場合は、「文化圏」という曖昧な概念で説明する。しかし「文化圏」が何を反映しているかは、不問に付すことが多い。都出比呂志さんは、土器型式が婚姻居住形態を反映するというアメリカ考古学の成果、すなわち「母系制（妻方居住制）社会では、女性が生息地にとどまるため、母から娘に継承される土器の技術は、小集団単位で維持される」という成果を援用し、弥生土器の地域色の小単位（旧制の郡単位程度の範囲）を、通婚圏の広がりとして解釈した「都出『日本農耕社会の成立過程』一九八九年（岩波書店）」。数少ない有力な分布の意義論である。

以上、とりとめないコメントで、とくに結論はない。妄言多謝。

## コメント2

### 歴史学における「境界」

濱田 正美

四月二日に開催された史学研究会例会における、古松、守川、合田、寺山、山崎諸氏の講演について手短かにコメントすること、これが筆者に与えられた当日の任務であった。今回はそのコメントを再録するように命じられたが、誠に情けない事ながら、当日しどろもどろで自分がどのような発言をしたのか殆ど記憶にない。それゆえ以下では、発表者諸氏が当日配布された資料を読み返し、ながら、改めてながしのかの感想を述べることでご勘弁頂きたい。

先頃の新聞報道によれば、ヨーロッパ統合の思想的な推進役と目される法哲学者が来日しての感想に、日本は依然としてそのアルザス・ロレーヌ問題を解決していないという趣旨の発言があったという。確かに、「国境」が過去のものになりつつあるヨーロッパから見れば、我々は「国境問題」に囚われ続けていると言うことになる。耳を聳するばかりの「グローバリゼーション」の掛け声の喧噪と、次第にクレッシェンドしつつある「国益」「国境」の擁護の叫びとは、奇妙なことに相互に打ち消し合うことなく、ある位相では逆に複合して不気味に増幅しあっているようにも聞こえる。我々のシンポジウムのほぼ一年前、北海道大学スラブ研究センターは「ユーラシアの国境問題を考える」という連続講演会を開催し、その講演は「国境・誰がこの線を引いたのか——日本とユーラシア」（北海道大学出版会）として刊行された。また、村井章介氏の「境界をまたぐ人びと」（山川出版社、日本史リブレット）という前近代の「日本国」の境界を巡る極めて刺激的な論考も発表された。このように、国境もしくは境界に対して多くの関心が払われる背景には、我々が現実的に「国境問題」を抱えており、それを克服するための示唆を我々自身の歴史や他地域の経験のうちに尋ね出すことが期待されているという事情があるのではなからうか。とは言うものの、「歴史に学ぶ」というスローガンは歴史研究者ならざる「歴史家」の営業用の意句にはなりえても、実は多くの場合内実のない空念仏に過ぎない。何故ならば、現実のある特定の問題に対処するために、一対一対応的に個々の歴史的な出来事から智慧を得ようとする試みは、対応する歴史的出来事を選択するまさにその時点で既に恣意性を免れ得ず、

選択を行う主体は、自らの予断に適合的な歴史的出来事を恣に発見できるからである。「歴史に学ぶ」ことを可能にするためには、一対一対応的な実例を探すのとは別の方法論が求められなくてはならぬであろう。

有効性が期待可能な方法の一つは、様々な歴史的事実を包含する座標系を構成し、しかる後に「現実」がこの座標系のどこに位置するかを測定することである。ここに言うところの座標系は、勿論比喩に過ぎず、そこでの座標軸や原点が何であるかをこの作業を行う前に確定することは出来ない。しかし、にもかかわらず様々な出来事を同時に比較対照し、それらの間の相同と差異や、あるものには含まれ、他のものには不在である諸要素の検討を通じて、これらの出来事の配置図を得ることは可能であり、結果的にその配置図の座標軸や原点が何を意味するかも概ね明らかとなるであろう。そして、迂遠ではあるが、こうして構成された座標系のうちに「現実」を定位することによってのみ、恣意性を可能な限り排した「現実」の持つ意味の理解が可能となるであろう。

ところでこうした座標系の形成の試みは、特定の国家や地域を対象とする個々の歴史研究者が独力でなし得るところではない。個々の研究者がその視界を拡張し、様々な事例を知ることを通じて、自らの対象が全体の配置図のうちに占める位置を的確に理解することこそが、今回のシンポジウムの積極的な意義であると思われる。そもそも、「何々」史という冠を被せられた個々の学問領域は、アブリオリに「歴史学」である訳ではない。個々の研究者が、常に他の領域に対する関心を持ちつつ、その直接対象とする領域のうちにがしか「普遍的」と呼びうるものを探求する

態度を堅持することにより初めて、「何々」史は「歴史学」を構成する一部分となりうる。歴史研究者は、「普遍的なものか」という寶石を求めて自らの坑道の奥深くへ掘り進めなければならぬが、時折は穴から外へ出て、他の研究者が掘っている坑道がどこにあるか、そこからどんな寶石が掘り出されているかを知るための努力を惜しんではならず、そのような営為を通じてのみ「歴史学」一般の存在は担保されるのである。敢えて付言するならば、この掘り出される「普遍的なものか」が何であるかは、予め分かっているわけではない。それは、発見されて初めてそれと分かる類のものであるが、発見者のみならず「歴史学」一般の目利きには直ちにそれと認識されるであろう。

同様の事柄は、人文学全般についても妥当すると考える。歴史学の様々な領域への細分化の何倍もの規模で人文学は細分化されつつあり、さながら自然科学における細分化に追隨するかのようである。またやや妙な比喩を持ち出すことになるが、自然科学の細分化は、いわば挿し木による増殖の如きものであり、より生産性の高い改良種が次々と植えられる一方で、実を付けなくなったと見なされた果樹は放棄される。過去と現在の自然科学全般についての展望をもつことは、個々の自然科学の研究者にとっては必須ではなく、むしろこれを必要とするのは、自然科学の嘗為全般を人間理性の発露であるとの観点から把握しようとする科学哲学や科学史の研究者たちである。ところで、人文学が自然科学の「挿し木」による細分化のモデルに追隨する現象は始まって既に久しく、「新領域」さらには「超新領域」という看板さえ眼にするが、そこには大きな陥穽が存在すると言わねばならない。なぜ

なら人文学の諸領域は、「人間的事象の秩序」の探求という幹から派生した枝であって、一度この幹から切断されてしまえば、研究資金という培養基に挿し木したとしても、しばらくは生き続けるかも知れないが発根することは終にないからである。逆に、近代中央ユーラシアの聖者伝の研究のようなまさに片々たる一葉も、葉脈がこの幹の維管束に繋がっている限りは、個人としての研究者の営為という炭酸同化作用を通じて、幹の生長にたとえわずかなりとも資することが出来よう。換言すれば、個々の研究者は自らの営為と総体としての「人間的事象の秩序」の探求との関わりようを常に意識しなければならない。幹を離れた枝葉は枯死するほかないのであるから。

さて、シンボジウムの意義を強調するつもりが場違いな大風呂敷を広げることになってしまったあとではいささか面映いけれども、竜頭蛇尾になることを自覚したうえで、本題に移ることにする。国境なるものが存在するには、複数の国家の存在が前提となることは、ことさらに言うまでもない当たり前のことであるが、国境の様態はそこで接壤するそれぞれの国家の様態と国家間相互の關係の有り様、及び国境となる地帯の自然地理と人文地理的要因などによって規定されるとひとまずは言いうるであろう。農業生産の剰余の収奪に基本的に依存する前近代の国家にあつては、支配領域の拡大は収奪の対象となる人的資源を増大させるための一義的な要件であり、国家理性が機能している限りにおいては、その拡大のために不可避となる隣国との戦争や一旦支配下に容れた領域の維持などにかかるコストが、収奪しうる富を超過する地点と時点で初めて拡大への動きは停止する。(ただし、戦前、戦

中の日本の例を引くまでもなく、国家理性なるものが常に健全に機能するという保証はない。)国家がその存続のための農業生産者からの収奪への依存の度を薄めるにつれ、また支配される側における民族主義的意識が高揚するなどして直接的収奪のための対価が上昇するにつれ、国家は人的資源の獲得のための支配領域の拡大を断念する傾向が生じるが、一方物質的資源を巡る紛争は依然として継続する。

このような見通しを一応立てたうえで、古松氏の報告「契丹・宋間の澶淵体制における国境」について考える。そもそも契丹・宋両国間の「和平条約」には、匈奴・漢以来繰り返されてきた北方と中原の支配者の間の擬制的親族關係の締結が歴史的な背景をなすと思われるが、契丹・宋交渉の画期的な点のひとつは、双方の立ち会いの下に現地で国境線を画定して地図を作製し、境界とするに適當な自然河川が求められない西部では「界壕を掘り、標識を立て」て、国境を正しく物理的に出現させた事実認められるであろう。それは、華北という人文地理的には均質で、ある程度稠密な人口を有する一つの地域を人工的に画断して二つの国家それぞれの排他的な収奪対象に定めるために採りうる唯一可能な手段ではなかったか。「権場」における管理貿易以外の密貿易の横行、飢饉に際しての流民の越境、それにもまして菩薩戒を受けるための大規模なひとの流れは、国境を挟む両国の支配地域の社会が、文化、宗教、経済などの面で同質的であったことを物語する。人口稠密でかつ文化的に均質な地域を分けるがゆえに明確に画定されねばならなかった遼・宋国境の方が前近代ではむしろ特異な存在であったことは、守川報告「近代西アジアにおける国境の

成立」で明らかにされたオスマン・イラン国境との対比により一層明確になる。そもそも前近代の中央ユーラシアや西アジアでは、「国境線」の観念は存在しない。アラビア語 *ḥudūd* やペルシア語 *marzban* は、境界線ではなく辺境地帯を意味し、たとえばオスマン帝国にあつては、アナトリア全域がイスラーム世界の *marzban* である意識されていた。都市や村落及びその住民の帰属だけが問題であり、それらの間に広がる収奪の対象に不適な砂漠やステップは、国家の直接の統制には服さない、往々にして御したい遊牧部族に委ねられていたのである。オスマン帝国にとっての対イラン国境問題は、まずもってタブリーズという主要都市を保持し続けるか否かの問題であり、逆にサファヴィー朝にとってはバグダードが問題であつた。セリムとスレイマンの父子二代の戦役によって獲得されたタブリーズではあつたが、サファヴィー朝の反撃を前にしてはその維持の対価は収益を遙かに上回つたであろう。そうした判断の結果がアマシア条約の締結となつたと思われる。スレイマンはアナトリアに接する山岳地帯の領有に拘泥せず、むしろ肥沃な農耕地帯である「メソポタミア」を確保し、紅海とペルシア湾に艦隊を浮かべてインドに針路を向けポルトガルの駆逐をはかつたのであつた。守川報告が強調するように、西洋列強が持ち込んだ「近代化」の圧力が及ぶまで、この地域の国境が「面」であり続けた理由の第一には、東アジアに見られる稠密な定住地帯が途切れずに広がるという地理的要因がこの地域に不在であつたことを数えることが出来るのではあるまいか。さて、スレイマンがインド洋からの駆逐を謀つて果たせなかつたポルトガルは、トルデシリヤス条約に定められた世界分割を実

現すべく進出を開始していたのであつたが、合田報告「未征服地分配の言説——レコンキスタから世界分割へ——」は、ポルトガルとスペインの両国が世界を予め両分するという、現代の時点から見れば殆ど誇大妄想としか思えぬ企ての起源とその展開を説き明かしたものであつた。デマルカシオンの起源がレコンキスタの二国間条約に遡り、アンダルスの再征服、北アフリカへの侵攻、大西洋への膨張が「ひとつの現象の三つの側面」であるならば、七一年にジブラルタルを渡ったタリクの軍勢こそが「世界分割」の遠因と言えるかも知れない。対蹠分界線をめぐる両国の議論は、恐らく人類史上初の「純粹に」ゲオポリティーク的な論争であつた。しかし、世界を主として収奪可能な資源という観点からとらえるゲオポリティークは、人間へのまなざしを持たぬ以上人文学の幹から派生する枝ではありえない。戦前、戦中のドイツや日本の例を持ち出すまでもなく、学問的装いのもとでのゲオポリティークの横行は、往々にして危機から破局へ向かう時代の徒花である。ただし、ゲオポリティークを生み出す人間精神の働きそれ自体は間違いなく人文学の対象であるから、その言説の外に立ちつつデマルカシオンの発案者たち、満州国の「建設者」たち、ヒトラーやスターリンが空想した世界が如何なるものであつたか、またその空想が現実如何なる打撃を与えたかは是非とも明らかにされねばならない。

複数の国家が接壤する地帯が、文化、宗教、言語などの面で均質である場合はむしろ例外的であり、これらの要素が様々に錯綜するほうがより広く見られる現象である。寺山報告が取り上げたフィンランド、カレリア、インゲルマンランドでは、フィン語を

共通としながらも、フィンランドとインゲルマンランドの住民はルター派、カレリア人はロシア正教の信徒であるという宗教上の差異に加えて、ロシア革命期には革命と「大フィンランド主義」という二つの軸の間で状況はさらに複雑化する。ヘルシンキにおける革命政府の樹立に失敗して亡命した「赤いフィン人」たちが、まずカレリア共和国を樹立し、これ将来のプロレタリア化したフィンランドに統合することを構想していたと言う事実は、この二つの軸が交差しそうになる局面が存在したことを暗示しており、大変興味深い。その後スターリンが採用した、敵に内応する可能性があると見なされる分子を国境地帯から予め取り除くというゲオポリティーク的政策は、多くの犠牲者を創り出すことになる。ところで、肅正と強制移住の時代に国境を越えてフィンランド側へ逃れた者はいなかったものであろうか。これはシンポジウムの当日に寺山氏に伺っておくべき質問であった。

国境は人々を囲い込む。しかし、人々は様々な理由で越境を試みる。特に、生存条件が甚だしく悪化し、国境の向こうにこちらより少しはましな生活が期待できる場合には、ときとして集団的越境が引き起こされる。寺山報告でしばしば言及されたマンネルヘイムが、フィンランド独立以前の一九〇七年にロシア陸軍将校として訪れた新疆のグルジャ（イリ）地方では、何度もこうした越境が行われた。この地方では、一八六五年に現地反乱によって清朝駐屯軍が壊滅し、現地のムスリムの政権が一応樹立されたが、一八七一年にはロシアがこれを保護占領し、清朝による新疆再征服をうけて締結された一八八二年の第二次イリ条約によりロシアは撤兵した。その際、清朝の復帰を嫌ったイリ溪谷のタラン

チ（後のウイグル人）の一部は、国境が再確定されたロシア領へと移住した。彼らの内には、ロシア革命後、とくに「東トルキスタン共和国」の時代にイリに帰還した者もあるが、「大躍進」と「文革」の時期には再びソ連に亡命、中国で「文革」が収束し、「改革開放」が一定の経済的安定を保証するようになる一方で、ソ連が解体して経済的困難が増大すると、またもや中国側へとその越境の方向が何度も変えられた。選択肢は二つしかないが、にもかかわらずより少なく悪い方を選ぶことは出来たのである。

アフガン・パミールで遊牧生活を送っていたキルギズの小集団は、越境の今ひとつのタイプを呈示する。ロシア革命以前、彼らはアライ、トランスアライ両山脈の間の溪谷であるカラテギンで遊牧していたらしい。一時期中国領に入っていた形跡もあるが、彼らはアフガン・パミールに落ち着き一九七三年のクーデタまでは、カーブルの国王政府と良好な関係を維持していた。内戦の勃発により、彼らは畜群とともにバキスタン領に出た。彼らはそれ以前からCIAと関係していたとも言われており、レーガン大統領に対し自分たちを家畜とともに軍用輸送機でアラスカに移住させて欲しいと請願したと伝えられたが真偽のほどは不明である。ときあたかも、バキスタンを訪問したトルコ大統領ケナン・エヴレンへの請願が受け入れられて、彼らは家畜を手放し、トルコに移住してヴァン湖近くに定住して農業に従事することになった。現在トルコ共和国に住むカザフ、キルギズ、ウイグルなどの中央ユーラシアに出自を有する人々の大半は、このように次々と国境を越えた親や祖父母を持つ。

国境の内に人々を囲い込むことが国家の威信の保持と直結する

という想念に国家が囚われるとき、越境はこれを試みる者にとりまさに命がけの試練となる。昨年九月三〇日にエヴレスト西方のナンパ・ラの峠で発生したのは、まさにそうした事件であった。海拔五、七〇〇メートルを超える雪に被われた峠をネパール側へ越境しようとした女性、子供を含む数十人の隊列を、更に高所の稜線から国境警備隊のスナイパーが銃撃し少なくとも二名を射殺した。出来事の一部始終は現場に居合わせたルーマニアのテレビによつて撮影され世界中に報道されたが、如何なる理由からか日本の大手メディアからはほとんど黙殺された。当時峠近くには、チョーオユー登頂のため百人近くの登山者がおり、中には日本人も含まれていたと思われるが、彼らからもこの事件に関する情報は聞こえてこない。

黙殺が支配するのはヒマラヤの峠だけではない。ときに断片的な報道があるとはいえ、我々は沖繩における米軍基地がもたらす状況を殆ど常に黙殺しているという事実に改めて気付かせたのが山崎報告であった。一国の内にその国家主権の及ばない鉄条網に囲まれた広大な土地が存在する事態は、間違いなく領土問題の一

変奏であり、「基地問題」は「北方領土」「竹島」「尖閣列島」に並ぶ第四の国境問題である。「北方領土」には旧住民の問題があるとはいへ、「竹島」や「尖閣列島」は漁業資源や地下埋蔵資源の確保が主たる問題であるから、これに過度に国家の威信を絡めぬ限り、下世話に言う「損して得取れ」式の、或いはフィフティ・フィフティ式の解決も可能であると思われが、沖繩の問題にはそうした解決方式は適用できない。また現在の日本国家が解決のための方策を積極的に探っているとも思えない。しかし、そうした状況の中で、例えば先島諸島から、那覇、鹿児島、東京を意識することなく飛び越して、直接アメリカへ出かけて行く人々があるという山崎報告は、負の状況をも逆手にとって自らを外へ外へと開いてゆく常民の活動力の端倪すべからざる逞しさを呈示するものであった。

以上、冒頭の大言壮語には及びもつかぬ雑多な感想を記したのみで、座標系を形成するための整理には到底成り得ていないことを、シンポジウムの企画者、報告者、そして誰よりも読者諸氏にお詫びする。